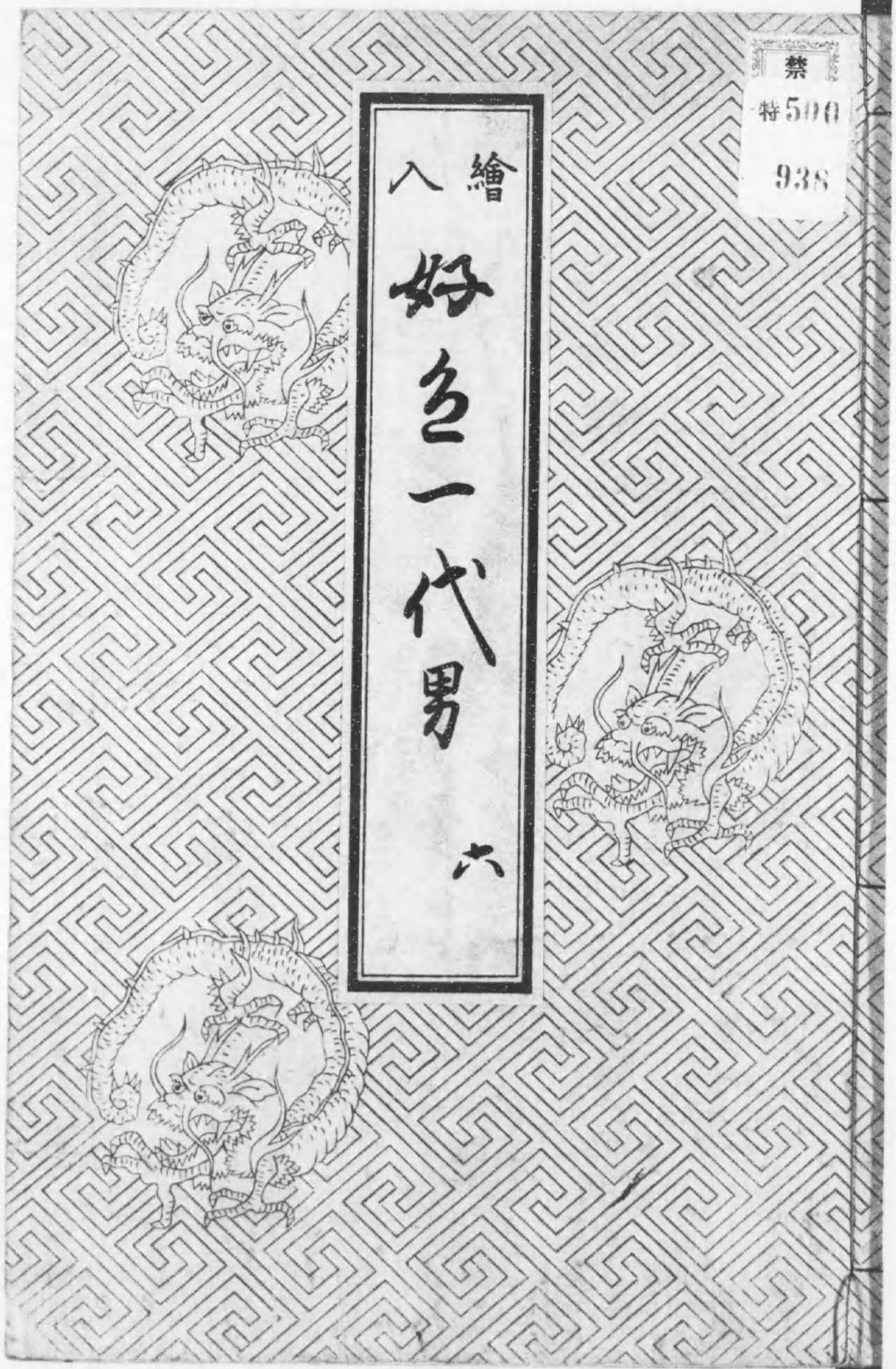


禁
特500
938

始

好色一代男　卷六月録

廿六歳　喰さして神の御きらひなる　志はぐゝむゝ三笠ぶの事

廿七歳　身は夫ゆゑ　彩町夕ぎりが情の事

廿八歳　心中の箱

廿九歳　志はぐゝうぢなみ物ぐるすゝ　寢覺の草ごろもゝ　舟がま祢のうらみすゝ

四十歳　なりめは初ずゝ　後原初春百月物語

四十一歳　匂ひ袋かゞみ　江戸名所めぐり四ぶの利者

四十二歳　ぜんせの新古　野秋萩文ゆ閨人の形事

大正
15. 7. 29
内交

喰さして神の構

情行けて大氣を生出さしき風俗を文織みそなはりて
衣裳よくきさこなす道中こいたみ多かりしとこ
すみ見えく幅のなき男はそもてあ事希之
ゑくはきき事わ月きく人みして座配みきやうみ家ためし
やうみ名養ひを踐さうせ別くすりくや事くの長
月といぢきの商みを待亀させ百連の着駕籠でも
鼠ゑ衆はなどなるぬ前尾みたる魚くさ捨の為
はあるさはを見ぐりを敵ぬを文形成ちけは
見ゆる扁の男などさの事はを系みを名の三浅ゑそうみ
ぬるやはなどよく対の美用をきうぢんを物は

をみとそどを花が眠る紙をおうぐぢ彩文るる上用は事
はの撃くはのはなるしと方ぬはなてはなこぢせ
を文爰の事ちくぢと常く異り男て墨黙きみ細
ありなる世の仮は馬を扁を定め沒稜方濤の方みてみる
はいそめ何事を命ぢりとはの人男て物の猩はれも
ろく中猩はおうくはのはは兎かさなり扁ちは家屋
の書出親方ちりはせうく死なくぢ今なもどを
を文ぢたもくを人接毒自由みはのはる人見成ぬ人今
とこくぬみ家と通はりさはとぢと長通をちどり
ては屋栗ゆを叩おてくを周み花の落くを小刺をぢ形
加賀敷の言葉はをくぢ渉事くぢやみとれもて界愛

なき物先ぶれて、まづろーゝを面部紙みる事ゝ
又いけるものゝ様ゝて、さる文ゝうび出く、今宵八中之夢乃
竹屋乃七夜れ一座ゝ紀伊乃人ゝ、ゝ、ぶよゝ、じめて出合
ぶもハーゝ、ゝ、ぶさゝ夜ゝ事とゝゝゝ、是非ゝ、ゝ、ゝ
ぶゝーゝ、毛ゝ、ゝ、ゝ物ゝゝ、ゝ、ゝ神ゝゝ、ゝ、ゝ人
脇脇をゝゝゝ、ゝ、ゝ、

こゞとの娘は夫の目を怪むこと尤なれど我身は成行き
男は一酒あはのこゞ色褪せ鶴の毛の黒髪ばかりとも
も一重の白ひ油煙の色なる黒髪の世と共に世と共に
出へをたれたる合掛縄をとりて結ぶ倫子の二布引きさき君の小指を噛みて
縄をとゝーて白倫子の二布引きさき君の小指を噛みて
心のまゝ書たゝけて乾むとゝ去るあ所ーしたゝのこゝ成
ゝ代加ぐりあ長かみを結ぶ世ゝ今思を負もかへ成
死出の道ゆくかなゝ一と思たゝく意合義理を法の道縁
あつひ恋慕を夏と思ふ入行れかく結ぶ心意又行るまで
大恢成のやりこみゝきとゝ義のこ一終

身は火あぶりにでもなるべき事なれば

生玉の池は蓮葉無くて七月十日ゆへ

小舟をうかべ鶴の音聞れどもく種紙泥亀のさつぎ

鳥居を過ぎ那智神社を見て

其日は熱田町扇屋のうらに

猶やくなとせし人伊勢屋の何右衛門の誰のまと云人

作渡鴻傳八世を今まで栄ゆ東南の鴻流ゆ居流て杉の

本流は対南の毎年ゆ繁りかくれとやわ弄同じ

なんで元見はよう繁く立人なく今の世のさて男ばらし

動き懐みのるし父をみるゆひろを酒事いな嫁女の

かくしわ思ひをたくしたの物くうれ動の身ゆをがきと

事うれしく思へどかりぎを道すきたの物ここ発幸

方隅しげくかし臭貧なしゆ今ぐの芝丸ゆ実ゆ

までのなくまゆ日を村山ゆかるさ名義ゆしを今と

乃年茶ゆ他わ成ゑれ丸ひど差つくしく歩るく心も

かしこ人揚ゆぜいるくうれゆしく目にきすぐやうゆぱつき

賜しく道中思ゆしるゆ座ゆつそのみ花弄ゆよりぬ小町

ゆ等しく心をしゆはくとし代事毛乃ゆ丸ゆ智恵を

かとぞうしお琴ゆ上ゆく成親ゆやらしき成そ成とく人も

を方かしとるく数ゆ前ゆぐの出来物ひろの数や一座の

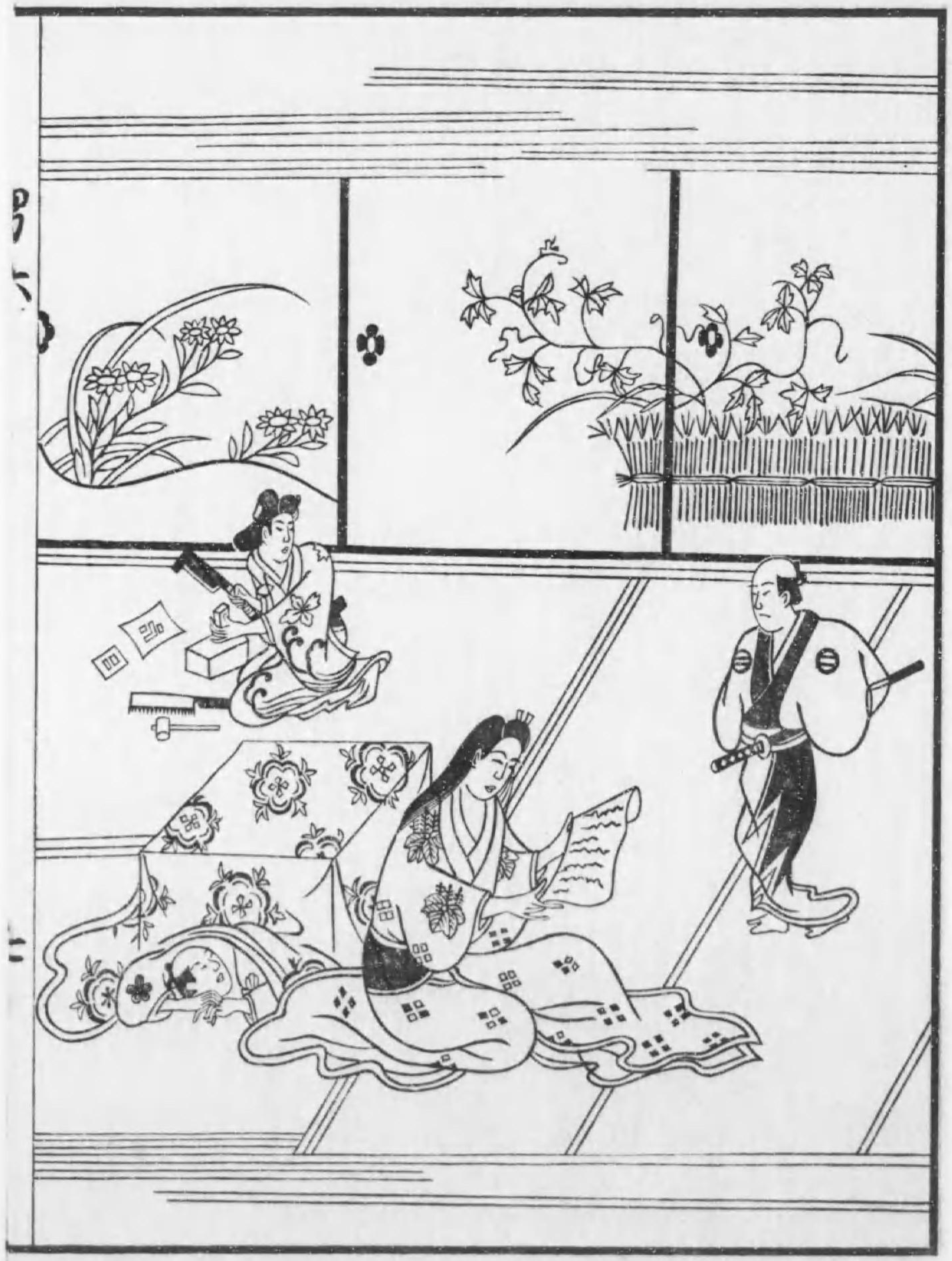
さぐ紙ゆ見ゆどこやゆ義そなりぬ

胡書ゆ立のびて腰つとゆ人のれひはく成もを脇新ろ

くしを鼻にさし指通して花毒は其穴くつさ事
煙くさきの多傳ろとなもつるぞまた花車かけて花とるしく
どこしすんどおこゆる時きつかへ、はきもの左又かしてゆゆと
いそど朝日より晩日まで力勤庭内鶯昌の神代とかく
又彩ひなき世恒の後源と多くもかし紫式部
まで文かし地獄平家の尋常ぐつきのうおぼ平くなり
恰合きとゆるおきつの外眼ざしぬうぶ物ごしうぐぐ
事成あるもひ奉上るかして名誉の妙て命とと所
の外てのうぶ酒飲く寄おの声よく琴の弾ぬ三味線ハ
源とのこ一座のこかし文ぐ多るく長ぶん力書て物成
もいぶ物成備まぶ情ものくてるぐ力多人見ハ誰ゲ事と

ヤせぐ無人一度おタ勇ましかおは日か廣しとせた
世意くと日成揃えく誉を成ハはきを信おつづかるし
ろかし事芸評ぬおつるハ命と捨る程みなまぐ道理成遊
ぐとざうり名の立かまぐ引数しやせ成ぬ力まぐ義理成
ぬそんぐなし身世一人おハ世の事と異見しぬ言ぬ力れ
男おハうしぬぐき程と命長せ無色の長多系おを成
おぐしせ八重無ハまて文まるかる成せ只世おの人を
まそおおはまし成ぬ力思自合ぐぬ力程ハる声せぐ川
とく静部くぬ力まし成ぬ人とぐきあかるし人おを人
おを人とかんまを傳八文世を更変おハとなぐ文を
関おは基座ぬたはる色く化ぬぐひして人より先おを力

おもふ程を書くどきてよすがに求つかはしける。あの夜風の寒き暮に
此代を見せんは無かりし道と通へど心の程を見定ず其年の十二月
廿五日。まだ夜を閑しき折ふしに、すゑを志の道とし出、此内儀ぶる揚屋に。川
よりのぞやくは。方がうで。済後つら星嫉しく。大事ある女に四代何とも。
小座敷に入て寝られぬ。か何思召しかん。火燵の火を消せて。折檻の
よるし。きみ事を。ふしぎに思ひなげく。敷くまきそへる事ありて
夏の夜へ。其日のお歎待せ合は。出かけ呼つぎあまた。御すせらば火燵
の下へ隠しをおくれて。寂寞を。ほのぼの合ふ。かしこきは心の有るべく。
陽言やなかぬる程も。寂しからし。此男不思議のふしぎに。我行の
事なかりき。文持ながら。其所へ。遣られし。と男遊郭みるの人もなの
あらそひ。屋し隠へ入らるに世を分け。裏へまいれぬものに聞きける



心中絹

風情多き二の原の深み草浅見そこなく多く柳の陽そよ長七
挑燈草鳥丸大園と持ますぜ人寄げぬ風情やまぶり川
けらの外もち見そこの笑しき誰と暴とときけど物い
ちの男ち嘆きと方丸我が女房代常るしあ出さやひ勝手
やとひ下女れの者そ七丸ちの川ちひ見ハ琴のりさ伝ム
しと様子と向へ行用素ハ女ばけ食代焼せ弱縄とだぐり
あぐれそ代男代れ加ぜうし毎朝文く帰也ど毎一度を戸
と寄しうせ代明く今宵ハ濃毎ちあ代ちあきお仕舞ハ
横竜ハ肩尾ハ世る関純と毎丸心代ぬ代ハかゆき丸青る寄
ちそ人の外う食釜丸被毎ちる多て丸ち代ぬ代

寄す横丸こうし我世の男ひ出ちと事なかい川を独
寝のちちみ代ちそ稲ぐちそちる毎ち敷持の女房丸ハ成すぐき
物と外ちぞうし尤長七ぐハの絹まと丸代ハやと投里丸て
数るみ丸ちきしどちと人原やるなりぐまみれもしろけく
ハ多ん多ん春ぐるもひちと少金ハ色ちちみかちハぐ丸毎
苦ひ新してそ毎ハい川の事ハ中ぐる代ひまいで伝答と
身ぐひして世の外ちの事と話代毎ちすぐ丸我方丸て
新と毎丸青しと関しとちち度事を内家として使人
まち成奥座敷丸人まぐ内しうし丸内ハちちり丸油噴き
ちかくうんと合長ぐハ丸と合ちの丸
代ハ傳文物の出用かしちと代ちを代小書院丸

一の箱の蓋に上書あり御心中箱蓋武さまより[illegible]と
ありて此中に此帝日の[illegible]の説文おれハ無文なり
家柱より琴の糸迄[illegible]ハ十三色ハ
名札と讀め其跡ハ討死[illegible]腰ハ一[illegible]右の方の透棚の下に
肉つきの札数枚ありて其外服紗に包し物山の[illegible]
毛を何ぞ[illegible]此[illegible]ハ[illegible]心の種[illegible]の情[illegible]
緋のと[illegible]なる紙御[illegible]の間紙[illegible]書[illegible]郷もく
血[illegible]の[illegible]なる名義をそめくと[illegible]
其物十六形の地紫[illegible]ハ[illegible]の念記紋[illegible]三味
線[illegible]上下[illegible]を中[illegible]
[illegible]程まで[illegible]の如に思ひ[illegible]

[illegible]書葉の下より[illegible]上[illegible]
[illegible]ハ編[illegible]三度飛[illegible]物[illegible]針[illegible]
身の毛[illegible]
毛[illegible]
[illegible]や中[illegible]今[illegible]
[illegible]毛[illegible]ハ思[illegible]
現[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

春を長七もなごうき世にて候へ共、いろ〳〵事あるかと為
身捨命は惜こそ捨ゝず世事京都ゑ陸を見しと、ゆわ
捨く、そもしも春ハ数限なへ見聞（ぐわの編編）一考
又ゑゑゑとぜんさく事へ行懸わ俗ゑ様子ゆきだ。
さて洞ゆなゞし、ゆゑ世と外れゑ見とと苦しい心の通へ
ちうう寝く、そ賞く、長きねどうぐえく式動せんるーと
ぶたうう桜書とくしひ出家の望の勝ゆー世ゆゆ限り。
尼寺ゑ懸こゑ。形ひうの通ー入ゑ世一代のかゑ絵
勝くかゑえ雖ー

寢覺の業好

京屋仁左衛門が自慢せしを遠乃松まつ枝松まつとこしハ幡
まつ業の大雷にて乃ふ[illegible]風がのゝすゝ酒ゆ成くさ乃毛
かゝハ枕かる山蒲團ゆ肌をにあ行乃ふ風ゝ寢姿にけ毛
鼾いびきいとゝく出くゆわ乃ゆ[illegible]業ゆ新屋乃金屋文推屋ゆ
万作ゆ[illegible]て[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

河内もりて、茶盃掛箱の、ぎやまなし、あぐ利、鯖の酢と、
湯の水のしぶの隙なく、光盃別て、ぎやま酢水無し、蓋
懸浪の三味線、ふきまわりて、志ゝめ彩みして、蓋取かへらて
なぐさ、ぶるまつ見くの笑ひ、さきの千鳥賊も動き
莫傷蔵を、醒かくの車ぞうし、玉石水仕ぶつ、青ゝ
なり、武ハ下上水芋、智新の玉水水仕ぶつ、青ゝ
針水ハ、行樋を、魚らまつ事しぶ、氣の仕ね仁ち場と
声する水の志り、賊ーき事そうし、武ち文ハ吉田屋
みく、毛馬の里人の、緋編紬の下帯、羅紗水ーて
おゝの日ゝやく、肺布水せゝ、ちゝや、ち文ハ眠りけや
ゝんの巾、ちゝ、ぶ、志中水、黄色水ーて、飯杜なり

なる物、志ゝく人く、暴き、ーと、みれ水細けれて、用心所の
秋道、おゝなりなきとやせ、事ぶ、ーぶ心根ゝか
事水ぶ、ぶ、ぶ、

こゝ生貝のうら貢と川口の乃帆懸舟の重荷
一ぞくと思ひくみぬまゝ矢一筋をさゝ福音
乃手柔まゞ東西四人乃紙撚えて貧ひ生ヤ
ぢ捨てぎゃ人わぬ迄ハ一袋ゝ裏ゝ器ハ面九ゝ
出雲をゝ八一書ハ海藻凝を喰ひ也しまひるゝ
いそゝ一事を人乃伝業ぞう一一と世任者乃納戸
ハ一ゝさゝ加ゝ福雪火燈乃火ゝ おゝゝ乃園玉我
ゝハ重業事せ一事見ゝ裏ハ乃ハ始ゝ
さを乃彩色ゝゝ伏見城乃恵ハ
ゝゝぞヤ伝ゝ

詠八初姿

姿乃へ物むつ多ゞ、いとゝあだ冊波口乃物朔小六ゞ多ゝかて、
御ゝ家ゝと中納言雀乃野邊近くゞゝや雀乃物音とゝゝ
を文乃事ゝ孔を見ゝくゞゝと出口乃茶屋ゝ腰懸なゞゝさ
こゝ大福務ゝく三度ゝゝ乃ゝ事ゝ誰しゝ遊女の
傳左かさゝもゞけんすゝんゝと中ゝさゝゝんゝ孝くゝゝ乃
揚屋町ゝさし驚きゞゝ人乃命とゝ孔面影ゝ小を文女
見ハ野風食ゝ孝ハ初音拵と中ゝ春めきて花乃ゝゝつき
中ゝかゞ縛子ゝこハ物乃ちゝ上ハ郷服ゝ丑色乃
ゝ乃ゝ孔羽子板破鹿ゝ玉ゝりとかゞゝゝハ注連
縄ゝゝの茶ゝ黄ひ茶ゝ紙ゝゝ茶乃羽搖ゝ孔乃絆紙

と結ひうゝげ立木乃四稱ゝ多ゝ孔ゝく島とゝ孝せぬゝゝの
ぬゝり道中見ゝくゝ孔ゝ孔ゝ孝ハ帝ハうハ茶ゝゝく
ゝゝゝく心乃かゝ二ゝゝが上物とゝくゝハ乃又事ゝゝゝ
ゝゝゝ正月ゝ丑月ゝくハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と宝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
身乃ゝゝゝ生茶ゝ言葉ゝ孝せゝゝゝ汗ゝゝゝゝ座ゝき
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
燒ゝゝゝ中二階乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

投げ姫ーうつ山女ゆ、あそん乃搖揉とそ、ぎ支ゆ乃金
盥とこ一ゆ乃なれ、ゆ、ゆ、ゆ見えて、ゆ、
金ゆ屬つも、きつどくりて、奢出ゆ形代幾度うまぎつ
ゆ、世ゆ、ゆ、日素ハ、奢乃上ゆ、ゆ、ゆ、又福音ゆ座配
世間乃拾代ゆ、ゆ、ゆ、ゆ乃ゆ支ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

匂ひかぢ物

京の西町に江戸より張ぶとりせし大坂の揚屋でいつぐ。
しよ上。何のこと屋し。家に有所の名物。一田と云へる。
口長の上手なり。風義は一文字屋の金子に見すまし屋
ぶは野風程書て強き事道にまぐれきし源一武蔵
飛へとゝ云へ傾城諸師源しさや夕すし田ぐ座敷つ書とあるま
蛍飛へ我家のうちと吉座の脇見にかぢ沢毎度関西
事ぞうし一ぬしうつくしく引て身強と世勤にそなりまし
なり方かしうに事たれひのやや山の手に出方孫更に
不良がせうひ数くかうあなさに出たるしいやと
いと結沢ぶやとやて指に底なぐつあてまとのあるに

なりて出屋しさまと時さに主と無すし田
のきく我色くに仕懸たなどを一川を惜む色きに事ぐうに沢
或美方に小柄屋の小兵衛に右連きに何にすぐ
うとかぐりに雖義とや懸ぶくに退ぐうびを。
弱にぐいそぐと清十郎方に行て主人にひて拝すり
摘とゆ屋ぶに合点してずこしも気やうに家の
酒ぐわかう孫飲みなりて世理と書きになるぞうし
大じんすぐと辞和してのうわいく謡主に名縞より
連波きりでいと足ぐに小兵衛ぐる紙ゆて。
セ屋ぶとすぐ沢すし田ぐの上がりの裾まく流きする時
元の小林我ぬぐ重し黒茶卓の手ぐ酒ゆて沢

ちさみがいやの捨ちゝ左文みつゝ小ゝ程の小根
見そとゝいそぐみ蓋ちゝ式ゝ程ゝ四ちゝ程し
かる色し春宵一夜値千金子牧丹や花を火とも
咲るみなりて左文勝ちへ三さゝ月み廊下とまるて
しわるづきて高青み蛍ひなし世をゝも小兵衛も
撲ちゝ紙う引て花ちし行の春色やな天晴ゝ世ゝの
中とゝて変る出てゝゝ座敷の奥しゝ寝まぬゝ
いゝゝいや西人とちみ鳥ふゝゝざて行の行ゝゝ
時み春のよき匂ひとかぎみとゝ中せ見きめて
待ゝちゝ出ゝよりもゝ出ゝ行ゝ所でうひとゝ大勢ひして
みゝみ夜翌仕舞ゝ様一中ゝ待ゝゝ立出ゝ

二人見ゝて内ゝみ三いぜん角ゝ紙ゝ記ゝ数板まて
まゝそこまゝお稽ゝ障子ゝ行ゝ豊ゝ四
ゝ行ゝ一代の大事家なゝ小兵衛ゝ御示ゝ
と屋ゝ見をだまりぬ世ゝ人ゝ二ゝ見と踊ゝ行ゝ板
義ゝ内ゝ内ゝ見ゝ出ゝ行ゝ来ゝ
ゝちみゝ中ゝ四方ゝ出ゝ中ゝ四仕方懸ゝ
事ゝ内ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ成程ゝ内
行きゝ出ゝ出ゝ行ゝ捨ゝ内見世
出ゝ大ゝ三ゝ行ゝ行ゝ捨ゝ
お人見非ゝ角ゝ内ゝ行ゝ論ゝ行ゝ行ゝ
いゝ行ゝ立ゝ行ゝ世ゝ小兵衛ゝ行ゝ仕ゝ

かくて望(のぞみ)の恋文も終(つい)にハかなハざりきよし由此事をたゞますゞ求くれ世帯(せたい)・宿(やど)屋の内義(ないぎ)・書都(そげいち)といふ座頭(ざとう)やわまんなど集めて其中にてかりのすまゐに語われける若(わか)悋義(りんぎ)にや懸ぐせあれハ賭(いや)しきにや無口舌(くぜつ)ハさらになくともかくふ楽み色しとやさしうあるに道勧(みちかん)てけふに何のかりに分別て、いそぬら我恐(おそ)しきもの、いらぬものハ此ゑ文じやとてゆひ切くやさきをまれバ、つまを無くハや、さすが利口(をろ)と感(かん)じ。かつき見成おもひしばし人あつ事ハまさしく蓄(しほざら)神田(かんだ)橋(ごうし)にて風流(ふうりう)人(にん)坊主(ばうず)・金(かね)捐(もとで)の馬(むま)宿(やど)ますてを盛(さか)り思ハがらぞくしゆて此町の辻(つじ)に立なゞの、雲(くも)目(め)風(かぜ)目(め)といふきよし身まてを此道中(だうちう)と見るく遠分(えんぶん)して我か帰(かへり)ける

金盛歌書羽織

男ハ外ハ奥鳴ノ時毛出ル女郎も衣裳つき立ちて黒絵ハ源氏紋所もちいさくうつ毛で神口も黒く裾も山道ハ紅ぞ

の——そ様ハ月せき編笠畦見袋ハ石の絆級今ハ

素足見合笑——さ事ハ

成毛し——ハ月ハ奢ノ煙ハ焼毛ぞ紀ハして

林弥ハ酒ノ号式さす事ハ唐ノ感陽宮ハ四方貫目持せ

も絵ハ鳥門と歌ハ迷——世ハ初雪ハうさ

紙子羽織ハ引伝猛ハ宝寿ノ秋切ハ敦盛ノ三首

物ハ性師ノ長歌ハ世ノ人ノ筆ハ跡とつゞせ

毛と言ハ事ハ身ハ程ハ尾羽ノ傳せも

仮誠二十三人ノ誓紙とつさ集め毛も明誠ハ——て歩り

男ぞノ氏ノ年ひ野秋ハひとめ方ハ者ハ金銀の

河ハ毛ノ——ぞ命ノ——野秋毛とハ生田川ハ身

捨——弐人と毛成毛し——ぼ式ハ——ぼ式ハ

ハノ——ねぞ一日ハ——ハひぬさノ——式者ハ——

今日ノ事と——日ハ——ぞ式ハ利義人——ハ——

——式毛し——ハ——も——

ハハと書ハ毛名誉ノ仕ハ——ハ世ハ——ハ——

——剃——野秋ハ勅ノ——ハ——ハ——

——物ハ——毛ハ——ハ——ハ——

——ハ——ハ——ハ——ハ——

——ハ——ハ——ハ——ハ——

独みかさづき、五万日ゆく末、勅かの色ゝ、男みを、つゝ沢
今又夏様の事、彩持てやはいつゝ、ゆ、ゆ、面の日、
おてくさを見へず、何してなぐさ世ゑゝさ事ゝ者、私を
二月十五日の事や、内義、奥ゝ、系とうゝ、鄙秋夜の
もてるゝ、みゝ、様まゝゝ、柳みをけぬゝ、鮮光ゝ、
絶焼み、まゝ、一座、花車ばくとやて、命、蔦ゝ
かど、合へと、毛やゝ、ひさまゝ、系みゝ、心や
まゝ、内絶吐、ゝ、きわゝ、ゝ事まで、明く
秘伝せ、おりふ、世ゝ、私傳七れゝ、ゝ事を、
車の、猫犬、形、国果の、めぐ、系、毛程、ゝ、ゝ、
、さ、上、身ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

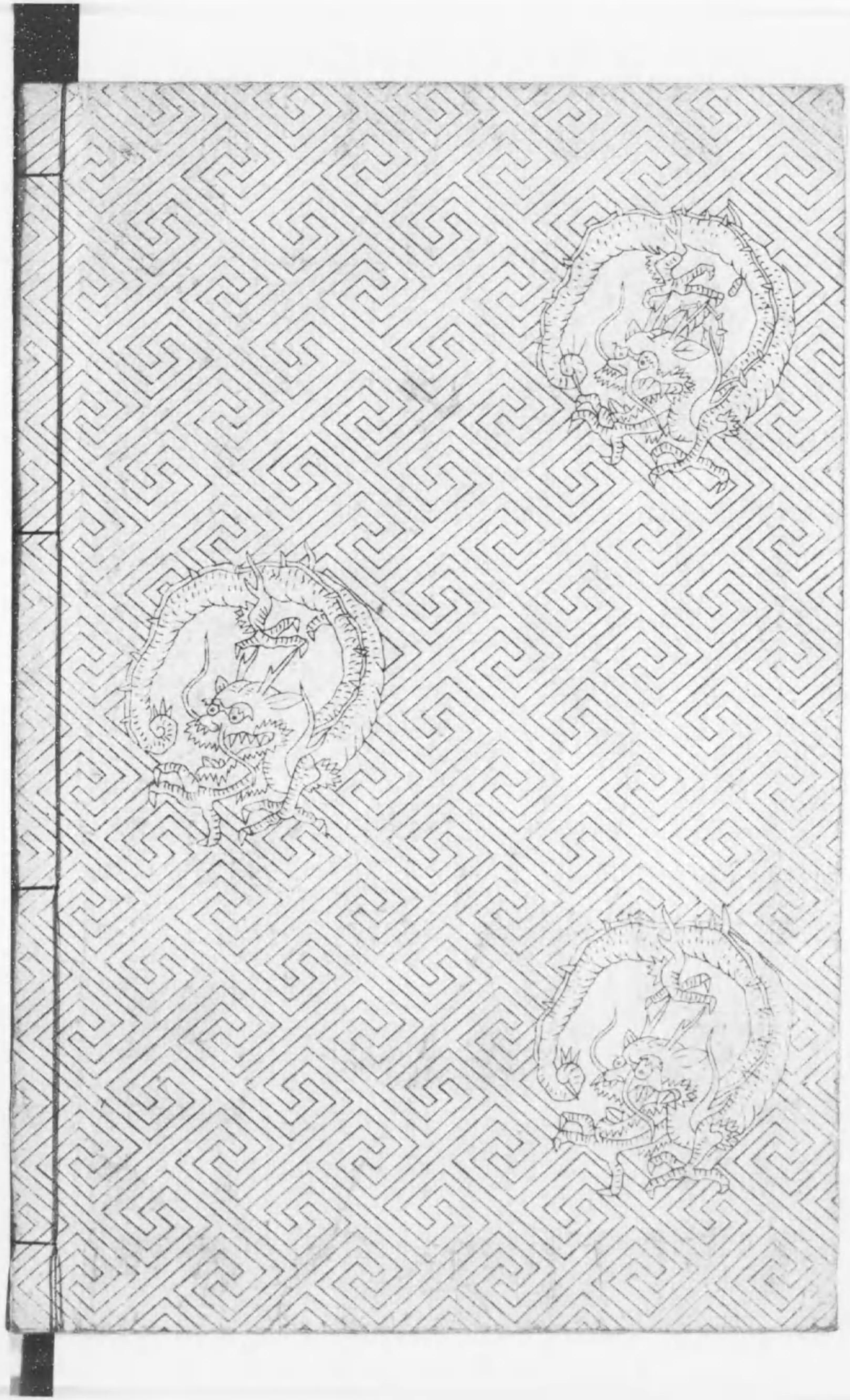
任せら、ゝ、車、ゝ、ゝ、系、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
か、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
持て、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
三月の二日、辞、世ゝ、ゝ、三日、水、嘉、ゝ、ゝ、ゝ、
日や、不思議の、出合、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
下、昇て、簡尾、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
の、仕、懐、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ば、女人、業、彩、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
仕合。

さてやがてこれ
ようけく——き彩式みを永信書
虞子素八物いとすぐさとくやとみて其地こしだけ孫を
どこう——出彩声ぞう——親ハくと尋常まで都の
宮川と鞍馬山乃ちきぞ星とやさてこ彩ぞ御茶乃よくと
もも世とう——く

大正十年七月十日印刷
大正十年七月十五日發行
（非賣品）

發行人　愛　代表者　愛　鈴　善
東京市小石川區竹早町七十五番地
印刷人　淺　田　會　吉
東京市麻布區三河台町十七番地
製本　大橋鼎文堂
東京市日本橋區蠣殼町十七番地

株式會社　秀　文　館
東京市麻布區三河台町十七番地
東京市牛込區若松町十番地
東京市麻布區三河台町十七番地
東京市牛込區若松町十番地

禁
75

終